

翻 訳

パルヴス「世界市場と農業恐慌」(一)

Parvus; Der Weltmarkt und die Agrarkrisis, Neue Zeit 1895~96.

大 藪 輝 雄  
鈴 木 敏 正 共 訳

翻訳にあたって

パルヴスは、大月版『レーニン全集』につけられたマルクスIIレーニン主義研究所の訳注によれば、「ア・エリ・ゲリファンド(一八六九~一九二四年)の筆名。社会民主主義者。ドイツに亡命、一八九〇年代および一九〇〇年代の初めにドイツ社会民主党内で活動し、その左翼に属した。世界経済、農業恐慌その他の諸問題にかんする多くの労作がある。『イスクラ』と『ザリヤー』の寄稿者。ついでメンシェヴィキ。ブルジョア民主主義革命の否定の意味に曲解した『永続革命』の理論をとなえた。一九〇五年の革命のときにはロシアにかえり、革命の失敗後、流刑地からふたたびドイツに亡命。

第一次帝国主義戦争のときにはドイツ帝国主義の直接の手先。主著『世界市場と農業恐慌』(一八九八年)〔大月版『レーニン全集』第四卷、五〇六ページ〕と紹介されている。パルヴスの伝記としては、さしあたって、ゼーマン・シャルラウ『革命の商人——パルヴスの生涯』(蔵田雅彦・門倉正美訳、風媒社、一九七一年)があるが、「ドイツ社会民主左翼」から「ドイツ帝国主義の直接の手先」に至る彼の生涯については、まだ明らかでない部分が多い。

パルヴスの名前は、何よりも、彼が「ドイツ社会民主左翼」時代に書いた連続論文「世界市場と農業恐慌」(『ノイエ・ツァイト』一八九五年~九六年、ロシア語訳書一八九八年)と、

それに対するレーニンの書評によって知られている。

レーニンによれば、一九世紀末農業恐慌に対するバルヴスの見解は、恐慌が「世界資本主義の全般的発展とは無関係に考察されており、特定の社会階級の見地からは考察」されていらない「ナロードニキの議論とはあざやかな対照をなしている」。そして、「農業恐慌の究極の基本的な原因は、もっぱら資本主義の発展によって騰貴した地代と、それに照応する地価とである」というバルヴスの結論は、エンゲルスの「現代の農業恐慌によってヨーロッパの地主は以前のような地代を徴収することが不可能になっている」という認識と「大体において一致する」(大月版『レーニン全集』第四卷、六四〇六六ページ)。また、レーニンは、カウツキーの農業理論を擁護した論文「農業における資本主義」では、「バルヴスは恐慌と農業問題一般にかんする根本的な見解で、ガウツキーと同意見である」(同前第四卷、一七二ページ)としている。なお、講義要綱「ヨーロッパとロシアの農業問題にたいするマルクス主義の見解」のノートでは、「今日の農業恐慌」の説明の他に、商業的農業発展の前提としての「工業的發展」、「地代は穀物価格の低下を防げる」という地代の意義、「大経営の優越」

バルヴス「世界市場と農業恐慌」(一)(大藪・鈴木)

の説明のところでバルヴスの名前が出てくる(同前第四〇卷、一五、一九、二二、二三ページ)。

しかし、農業恐慌の究極の原因を地代に求める(したがって、農業恐慌解消の唯一の方法を「資本主義的土地所有全体を競売に付すこと」だとする)バルヴスの結論は、一般理論としては、後にリヤシチェンコによって、本質的には地代論の具体化に他ならず「農業恐慌の生産的諸条件と諸要素とを閑却するばかりでなく、資本主義的恐慌の一般理論と農業恐慌との関連を顧みない」ものとして批判され、『農業経済学』一九三〇年モスクワ、直井武夫訳、一九三四年、白揚社、下巻三〇八〇九ページ)、また、ゴルディエフによって、バルヴス自身の「農業恐慌は、徹頭徹尾世界市場的發展の産物である」等々の説明とも矛盾することが指摘されている(「農業恐慌理論のために」『農業問題』一九三一年三〇四号モスクワ、農業問題研究会訳『農業恐慌』第一輯一九三三年、叢文閣、三八〇三九ページ)。なお、ヘスは、農業恐慌における地代の役割は、リュボシッツやバルヴスの言うように農産物価格低下の阻害にあるのではなく、メンデルソンの言うように低下した価格への生産価格の適応を困難にすることにあるとしている(P. Hess "Zur Theorie der Agrar-

とはいえ、パルヴスの「世界市場と農業恐慌」は、一九世紀末農業恐慌を世界資本主義の発展との関連で体系的にとり扱った最初のものとして、その学説史的意義を失っていないにもかかわらず、この論文は、数ある農業恐慌論の中でも、とくに日本の文献においては、ほとんどとりあげられていない。農業恐慌論を世界市場との関連で展開する必要性がますます増大している今日、ここに「世界市場と農業恐慌」を翻訳するゆえんである。

なお、紙幅の都合で、一般理論をとり扱った、第六章「工業と農業」、第七章「資本主義的農業恐慌の一般的説明」、および第八章「工業生産物市場と穀物市場」は割愛せざるを得なかった。ここでは、マルクスの地代論によりながら、先進資本主義国での工業発展↓非農業人口したがって穀物市場需要の増大↓穀物価格上昇↓地代・地価・借地料の増大とその固定化↓後進国からの穀物輸入↓先進国における農業恐慌という過程が、世界市場における各国の相互作用、それらのおかれている地位と条件によるあらわれ方の差異なども含めて論じられている。

目次

- 一、はじめに
- 二、イギリスとヨーロッパ
- 三、世界市場におけるドイツの地位
- 四、都市と鉄道
- 五、農業の矛盾(以上本号)
- 六、工業と農業(省略)
  - A、工業の発展が穀物価格に及ぼす影響
  - B、工業の発展が地代・借地料および地価に及ぼす影響
- 七、資本主義的農業恐慌の一般的説明(省略)
  - A、地代の理論
  - B、恐慌
- 八、工業生産物市場と穀物市場(省略)
- 九、ユンカーの幸福と不幸(以下次号)
- 十、ロシアとアメリカの競争、経済不況、「農業の困難」

一 はじめに

世界市場が個々の国々の国内生産に与える影響については、すでに言い古されている。にもかかわらず、この影響はまだ非常にわずかしか究明されていない。ここでの通常の理解は、単に個々の現象を確認することで満足している。人

は、ヨーロッパの穀作が穀物の世界市場の発展のもとで苦しんでいることを知っているし、また、ヨーロッパの細羊飼養が、オーストラリアの羊毛輸出の結果、衰退していること、ヨーロッパの木棉工業の状態がアメリカおよび東インドの木棉收穫の如何によって基本的に規定されていること、等々を知っている。しかし、それらのことは、国民的市場の内的発展との類推からも直ちにわかる顯著な関係にすぎない。世界市場は、ここでは単に拡大された販売領域および生産分野としてあらわれるだけであり、その資本主義的な特質において、すなわち、特殊資本主義的市場としてはあらわれない。ここで理解されている競争は、ただ交通手段の発展だけから生ずるものであり、その際、資本主義的、世界生産 (kapitalistische Weltproduktion) が問題であるということは、少しも明らかでない。

しかしながら、今までの理解とは別の諸関連が存在する。世界市場は、その諸々の個別的な現象においてさえも、全体として把握される時のみ、すなわち、きわめて多様な世界市場における諸連関・諸結合そして諸関係——これらはすべて資本主義的生産のあらわれにすぎないのであるが——にお

パルヴス「世界市場と農業恐慌」(一) (大藪・鈴木)

いて、理解されるのである。

生産の地方的・自然のおよび技術的限界を経済的に克服し、こうしてはじめて、一つの社会的生産を大規模に創造するのは、資本主義の偉大なる革命的特性である。この成果は、ただ、社会的分業によって、交通手段の発達によって、そして商品生産によってのみ達成されるのではなくて、さらに——そして、これらすべてを貫ぬぎ、規定しているのだが——資本の再生産と蓄積によるものである。

資本の拡大再生産、すなわち、生産過程をたえず拡大された規模で更新する必要性が、販売領域と生産分野を持続的に拡張し、生産を集約化し、古い生産様式を破壊するか資本主義的に改造し、最も遠隔の国々を資本の生産領域に引き入れるのである。

国民的生産は互いに結びつけられるが、その結果、その国民的性格を失うことになる。国際主義 (Internationalismus) にかわって世界主義 (Kosmopolitismus) があらわれる。国民的生産はその自立性を失う。それらは、どんな国の中にもとじこめられない、まさに世界市場そのものである一つの生産体の、従属的で、関連づけられ、互いに規定しあう諸部分となる。

このような方向での発展が進めば進むほど、国民的生産の運命は、国民的観点からは——たとえ国際競争という修正を加えても——解明できなくなり、世界市場の発展から導き出すことが必要となるであろう。

われわれは、今やすでにまた、非常に重要な意義をもつ経済現象を一つ一つまともに究明するならば、国民的生産諸関連の結節点としての世界市場にたちもどる必要がある、というところまできた。だから、最近はじめて明らかになった多くのことは、わかりにくい・複雑なものであることがわかっている。たとえば、穀物価格の下落はアメリカ産穀物のヨーロッパへの大量の流入によって条件づけられているといわれている。しかし、これには、その流入は何によって条件づけられているのか、その正常な流入と過度な流入との限界はどこにあるのか、と質問するだけで十分である。そうすれば、

世界市場において遂行されている資本主義的生産の大規模な普遍化と統一化とが理解されない限り、数多くの解明できない諸関連にぶつかることになる。このことから、穀物価格と穀物の流入とのこの関係は非常に表面的なものであること、ほとんど同程度の正しさでもって逆のこと、つまり、アメリ

カの大量の輸入がヨーロッパの低い価格によって条件づけられるといいうるであろうこと、しかしながら、とりわけ、ヨーロッパおよびアメリカの農業生産の性格が穀物価格にとつて疑いもなく決定的であるが、それにもかかわらず、穀物価格と穀物市場の動きはなお多くの他の事情に依存していること、簡潔に言えば、個々の国の農業生産の発展は資本主義的世界生産との関連においてのみ把握できるということがわかるのである。

生産は世界生産となる。個々の国々の経済状態は、ますます各国の政治権力の領域外にある諸関連によって規定されるようになる。国家の政策は世界市場に左右されるものとなる。ブルジョアジーは、ますます、自分の運命を自分で統制できなくなり、彼の国家の政治の方向を把握するためには世界市場の状態を研究することが必要となる。

今や、ヨーロッパ、特にドイツにおける現在の経済および政治的狀況を、世界市場の實際の発展に基づいて明らかにする努力がなされるべきである。そうすることによって、農業の狀態およびそれと関連する政治的動向も、今までは注目されなかつた観点から説明される。

もちろん、週刊誌というわく内で、この非常に複雑な諸關係について、完全かつ包括的に科学的説明をすることは問題になり得ない。われわれは一般的な諸関連を概説することで満足しよう。

## 二 イギリスとヨーロッパ

どの世界市場の研究も、今なおイギリスを中心においている。それは、第一に、イギリスの世界市場取引が、依然として量的にはとびぬけているからである。第二に、イギリスは、その植民地所有・強力な艦隊および巨大な木棉工業のおかげで、アジアとオーストラリアの商業取引、つまり大平洋諸国との取り引きを支配しているからである。七〇年代の始めにはなお大西洋をも支配し、その結果、すべての海外市場はイギリスの権力下にあった。現在ではやそうではない。

世界市場の発展に対するイギリスの意義はさらに重要である。というのは、新興の国民的工業のどれもが、とりわけイギリスと対決せねばならなかったからである。

五〇年代のおそくまではイギリスが世界市場を支配した。

バルヴス「世界市場と農業恐慌」(一)(大藪・鈴木)

その唯一の恐るべき競争相手はフランスであった。ただ、フランスの工業は特異な性格をもっていた。フランスでは絹糸工業が盛んであり、この分野ではイギリスはフランスと肩を並べるほどには発展しなかった。その他に、フランスは当時すでに独特の工業をもっていた。羊毛工業においてのみ、フランスはイギリスと直接的競争にあつた。しかし、フランスの羊毛製品の輸出はイギリスの三分の二にも達せず、他の諸国はフランスよりさらに甚しくたち後れていたため、大ブリテンの輸出は羊毛製品の世界市場での流通全体の五〇から六〇パーセントを占めた。イギリスは、木棉および機械工業においては、とりたてて挙げるに値する競争相手もなく、完全に支配していた。

一般的な関係は次のようであった。すなわち、イギリスは、工業原料を植民地と合衆国から購入し、一部は工業製品で、一部は金と銀で支払った。ヨーロッパさらに合衆国では、工業製品に対して生活手段(通常はほとんど農産物)、次いで毛皮・金属などの半製品と交換した。かくして、イギリスは大きな世界の工場であり、ほとんどの他の諸国は、イギリスに対して、政治的にはいえなくとも経済的には資本主義的植民

地という関係にあった。

イギリス——その資本主義的工業は、この世界にはじめて出現したものととして、世界市場を自由に支配し、場合によっては、世界市場をはじめて生みだした——を除いて、他のすべての諸国では、資本主義的国民生産が発展すれば、必然的にイギリスに対する反抗がはじまるということにならざるをえなかった。その際に保護関税がどのような役割を果たしたかはよく知られている。しかしながら、われわれにとって重要なのは保護関税ではなく、ヨーロッパに資本主義的生産が展開することによって大陸とイギリスとの間に生み出された生産上の諸関連である。

新しく出現したどの資本主義的工業にとっても、第一の問題は販売の問題である。さて、そのような工業が、それよりたちおかれている生産様式が支配的な諸国に市場を求め、発見することは当然のことのように思われる。実際にまた、その市場を生産性のたちおかれている大陸および植民地に求めたイギリス工業に関してもそうであった。

しかし、イギリスより遅れて世界市場に登場したヨーロッパの工業国にとっては、事実はまったく異った(われわれの研

究は、後に、いかにして北アメリカ・東インド・日本そして部分的にはロシアによって発展の新しい第三段階を開始されるかを示そう)。海外植民地は、ヨーロッパ工業国が経済的に凌駕している唯一の国々であったが、それらはイギリスに支配されていた。それでは、ヨーロッパ工業国の商品はどこに販売されるのであろうか？

まず第一に国内市場が挙げられる。イギリス自身はそれによって、また、自らの製品に対する需要を喚起することによって創造したのであるが、それはなお、関税によって保護され得るといふ魅力をもっていた。しかしながら、資本主義的生産にとつては国民的市場だけでは十分でない。だが、外国市場はまさに工業国、なかんずくイギリスに開放されていた。新しく勃興してくる国民的工業にとつては、販売領域としての工業諸国の役割は非常に重要であり、したがって、たとえばドイツでは、生産がはじめて大規模に発展した時期すなわち、七〇年代の始めには、イギリスからの輸入は(オーストリアにおけるように)減少せずに増大したほどであった。したがって、ドイツの工業は、みずからが発展し得るために、

さしあたり、イギリスの工業を国内市場から駆逐することが必要であったというわけでは決してない。

しかし、ヨーロッパの後発工業が、生産の上では劣っている諸国において——これらの国では古くからの土着の工業自体が販路を見出し出していたというのに——先進工業と競争できなかつたのはどうしてか？ この一見して矛盾していることを説明するのは難しいことではない。

ヨーロッパにとって、たちおくれた生産様式をもつ国々は、すでに述べたように、海外領域であつた。それらの領域との貿易は、とりわけ、大きな商船隊を必要とした。しかし、その商船隊は、もはや大きな植民地を略奪することが問題にならないとすれば、すでにかなりの程度の工業の発展を前提とする。

だが、重要なことは、社会的な生産様式がたちおかれているほど、量的にも質的にも、商品需要は限定されたものになるということである。ほとんどの場合、この商品需要は、これらの国々と密接に結びついている工業国の若干の特殊生産物 (Produktionspezialität) と関連しているだけである。したがって、ここでの貿易の重点は輸入にあるのであつて輸出に

バルルス「世界市場と農業恐慌」(一) (大藪・鈴木)

あるのではない。事態は、それらの資本主義的変革の進展によつてはじめて異つたものとなる。

これに対して、古い資本主義諸国は、若いヨーロッパ工業と幅広い貿易上の結びつきがあつたがゆえに販売領域としては、若いヨーロッパの工業に最も近く位置していた。実際、国外から若いヨーロッパ工業の母国に競争をいどんできたのは、多くの場合、イギリスまたはフランスの資本であり、イギリスまたはフランスの技術家と機械であつた。加えて、これらの諸国の需要は相対的にはるかに大きく、したがつて相対的により専門化が進み、また、生産上の自然的ないし経済的な特別の有利性を利用するようになる。最後に、イギリスでは、すでに早くから世界市場向けの生産が発達した結果、自国の農産物需要 (Landbedarf) のための生産が相対的にたちおけていることが問題となる。この場合、農業と工業の発展の間の大きな矛盾ばかりでなく、部分的にはそれと関連するのだが、若干の大衆の必需品および奢侈品の生産にも注意しなければならぬ。

これが世界市場の諸関係であり、その下でヨーロッパ大陸、とりわけドイツの工業が発展したのである。(1) それらは、ドイ

ツの生産の発展にみられる性格を規定するにあたって大きく作用した。このこと自体については、以下でさらに述べよう。われわれの一般的な説明を裏付けるためには、次の事実を示せば十分である。

すなわち、一八九三年には各国の総輸出に占める他のヨーロッパ向けの輸出の割合は、ドイツでは七六パーセント、フランスでは七四パーセントであった。

第1表

1871~75	49パーセント
1876~80	48
1881~85	43
1885~90	41
1890~94	41

これに対して、大ブリテンの他のヨーロッパに対する輸出は、同様に総輸出に占める割合であらわせば、次のような動きをした（第1表）。

イギリスがその販売額（輸出額……記者）の五分の三をヨーロッパ以外に輸出している一方で、逆にドイツとフランスはその商品輸出の四分の三をヨーロッパに販売している。ヨーロッパの商品市場の動向をみると、イギリスは他の諸国によって、少くとも相対的には次第に後退させられている。

われわれはすでに、ドイツの工業の最初の躍進は、イギリス商品の流入増大に伴っておきたものだとすることを指摘し

ておいた。それは長くは続かず、一八七三年の恐慌は、とりわけドイツとイギリスとの大規模な対決であった。七〇年代の恐慌を生み出したものは「眩惑」ではなくて、過剰生産である。本来眩惑であったものがはつきり眩惑だとわかったのではなく、別のものが、過剰生産のはじまった時に眩惑となったのである。しかし、この過剰生産は、恐慌が最初におこったオーストリアにとっては、すでに一八七二年に輸出が約一七パーセント、すなわち六分の一以上も減退することによって予告済みのことであった。

いづれにせよ、市場の全面的不況によって、自己の地位を誰が放棄し誰が確保するかという問題がおこったという限り

第2表

年次	大ブリテン	ドイツ
1870	244	—
1871	283	—
1872	313	181
1873	311	151
1874	297	117
1875	281	124
1876	256	127
1877	252	138
1878	245	144

で、七〇年代の恐慌は決定的な意味をもっていった。その判定は輸出統計によって示される。百万ポンドスターリング単位で、輸出額は次のようである（第2表）。

イギリスの輸出は恐慌の下で不断に減少しており、一方、ドイツの輸出は——恐慌にもかかわらず——不断に増大したことがわかる。こうして、ドイツはその世界市場における地位を獲得した。

第3表

年次	ドイツとの貿易		フランスとの貿易	
	輸入	輸出	輸入	輸出
1871~75	100	187	208	148
1876~80	118	146	213	138
1890~94	132	137	220	110

までを受け入れている。

ヨーロッパ、中でも第一にイギリス向けの生産をする工業は、販売領域が植民地であるような工業とは別の性格をもっているにちがいない。ドイツ工業をその特性に従って研究することは、この相違をはっきり示すであらう。

バルヴス「世界市場と農業恐慌」(一)(大藪・鈴木)

イギリスのドイツおよびフランスに対する貿易関係は、七〇年代以来まったくかわった。

百万ポンドスターリング単位であらわせば以下のものである(第3表)。

両国との貿易において、これらの国からイギリスへの輸入は増大し、イギリスからこれらの国への輸出は減少した。今や、イギリスはドイツの全輸出の二〇から二五パーセント

### 三 世界市場におけるドイツの地位

われわれは、「ノイエ・ツァイト」第七号(一および二：訳者)において、世界市場の一般的な諸関連をスケッチしたが、その世界市場では、イギリスにおかれてあらわれたヨーロッパの国民的工業(その純粹型はドイツの工業であるが)の発展がなしとげられた。われわれは、ヨーロッパ大陸の工業の販売領域とイギリスのそれとの差異を指摘し、そこから、販売の差異は生産の相異に照応するに違いないという結論に達した。われわれの次の仕事はこの相違を明らかにすることである。したがって、われわれの現在の研究の中心はドイツである。

すぐに目につく一つのことは、イギリスにおける農業、関連産業部門の発展が大陸に対して、少ないことである。輸出向け経営としての酒精蒸留業および甜菜糖工業は、その中心地をドイツとフランス、そしてオーストリアとロシアにもっている。

七〇年代の始めに、エンゲルスは次のように書いた。「プロイセンにとつてのジャガイモ火酒は、イギリスにとつての鉄および木棉製品と同じであり、世界市場においてドイツを

代表している。」もちろん、それ以来、事態は激しく変化した。ドイツの火酒は世界市場からまったく駆逐されてしまった。（一八八四年には三三六〇万マルクが輸出されたが、一八九三年には四七〇万マルクである）、火酒にかわってあらわれた甜菜糖もまた、すでに著しく追いこまれてしまった。今でもなお、砂糖はドイツの最重要な輸出品目であり、それは、価額にして約二億マルクであるが、総輸出に対しては五〇七パーセントでしかない。しかしながら、はるかに重要なことは、ドイツの工業の発展における砂糖工業と酒精蒸留業の役割である。

酒の場合には、事態はかなり単純であった。穀物を輸出することが有利であれば（それはまさにそのとおりであり、それをイギリスの工業の発展が要求した）、穀物蒸留酒を輸出することもまた利益があったのであるが、ジャガイモ火酒はなおさらそうである。砂糖工業の発展はもっと複雑であり、これは、一般に、イギリスの工業的優位に対するたたかいかどのようにより進展したかという典型である。

イギリスは、まずはじめに（原料）蔗糖を輸入した。イギリスは、それを消費用砂糖に加工する精糖工場を国内にもって

いた。その際、イギリスは五〇年代までにはなお、相対的にかなりの程度の、粗糖および精製糖の輸出をしていた。甜菜糖と蔗糖のたたかいは、まず第一に原料の競争であり、それについてはフランスとイギリスの精糖工場が優位を保っていた。しかしながら、甜菜糖が蔗糖をヨーロッパ市場から駆逐するにつれて、それだけ一層、甜菜糖生産者相互の競争が増大した。そこから、同時に二つのことが生じた。すなわち、第一に、イギリスおよびフランスの精糖業は、しだいにヨーロッパ（したがってまたフランス）の甜菜栽培に従属するようになり、第二に、さらに、粗糖価格の下落が、粗糖のかわりに精製糖を必然的に市場にもたらした。その結果は、まったく自国の甜菜栽培にささえられることのできなかつたイギリスの精糖業の消滅であった。

このような展開は、特にイギリスの貿易統計に反映している。その動きは非常に規則正しかったので、単一の資料に基いて、その異なる諸段階を特徴づければ十分である。一八五六年にはまだ蔗糖はイギリスの総砂糖輸入の七二パーセントであり、同じ時に精製糖は輸入のわずか二・三三パーセントであった。一八六五年にはすでに蔗糖と原料甜菜糖は同じ割

合だけ輸入され、精製糖は輸入の七パーセントになった。一八七〇年には蔗糖は総輸入の三二パーセントに足らずに下がり、精製糖は砂糖輸入の約一二パーセントになった。一八八〇年には精製糖が輸入の一五パーセントになり、一八八五年には二一パーセント、そして一八九四年にはイギリスの砂糖輸入のほぼ半分になったのである！

こうして、ドイツでは他国の工業にとって役立つ原料を輸出することから——資本主義的生産の固有の法則によって——最後には世界市場の支配にまで到達する国民的工業が發展した。

個々の国で砂糖工業及び火酒蒸留業の發展に好影響を与えた特殊事情（火酒蒸留業の場合、プロシアとロシアにおける農民解放の果たした役割については、当時F・エンゲルスが明らかにした）を除けば、ヨーロッパ大陸の諸国における工業の發展にとって砂糖及び火酒を通過せねばならないということは法則のように思われる。

その理由は、とりわけ、これらの生産部門が直接的に農業と結合していることである。次に、しかし、その生産物は古典的形態での大衆消費財であり、国内自体にも広汎な販売領

域があり、そしてまずなによりもヨーロッパの消費財である。かくして、実際にも、フランス・ドイツ・オーストリア・ロシアはこの發展を遂行してきたのである。

資本主義的生産の一般的動向は、ヨーロッパのいかなる権力も指図するわけではないので、もちろん、東プロイセンのユンカーにとつてたぶん最も有利である、まさにその時でも、停止するよう命令できないことは明白である。それは、いっそう進展し、新しい關係をつくりあげる。しかし、そのような關係には、まだここ当分ならないだろう。もし、ここ数年のうちに、ドイツの火酒製造業が国内市場において限界づけられるようになるならば、生産された砂糖の五〇から六〇パーセントも輸入され、そのうち、非常に大きな部分がイギリスに売られるようになるだろう。

この發展がドイツの農業に対してどのような意味をもつかは別のところで述べる。

さて、われわれはドイツとイギリスの工業の構成の全体的な比較を試みよう。最初に、次の、一八八二年のドイツの職業統計と一八八一年のイギリスのそれとによって総括した表が研究の役に立とう。

次にあげた指標による職業グループの従業者、一、〇、〇、〇、人のうち、これらのそれぞれの職業グループに属しているのは次のようである(第4表)。

第4表

	ドイツ	イングランドおよびウェールズ
I. 鉱業、製錬業、製塩業	68	85
非鉄金属加工業	11	26
製鉄業	72	74
機械・器具等製造業	45	64
繊維産業	133	188
II. 化学工業	14	10
製紙業および皮革業	35	24
製材業および彫刻材料加工業	82	42
食料および生活必需品加工業	104	54
石材業および窯業	31	33
III. 建設業	148	150
被服および衛生業	208	204
印刷業	10	15
工匠	4	3
その他	15	26
合計	1,000	998

I、この表ははつきりと三つの部分に分かれている。すなわち、イギリスがドイツ帝国を凌駕している工業部門。II、ド

イツの側が優勢である工業部門。III、ドイツとイギリスが同程度の部門。この三分割は資本主義的工業の重要な一般的分類に照応している。

われわれがIIIに入れた工業部門は、都市の発達と密接に関係している。建設業の場合は明白である。衛生業(浴場施設、洗濯業など)も純粹に都市的である。それらは国内市場向けの生産である。疑いもなく、被服産業も同様に、その発展は大量の人口集中および洗練された都市の生産需要のおかげである。また、この産業は、常に、主として国内消費に依存しているが、その生産物は輸出能力もあり、それゆえに、後で説明する第IIグループとのつながりをもつ。

第Iグループは、機械および繊維産業、さらにその同類の生産部門を含む。それは、資本主義の生産的需要と植民地市場向けの生産である。この生産的需要には、非常に拡張された、被服産業の基礎をなす繊維原料に対する需要も数えられるべきである。ここでは、われわれの表が示すように、イギリスが大きな優位を占めている。しかしながら、この表では、とくに繊維産業については、その相異は非常に不完全にしかみられない。というのは、それには就業者数があげられてい

るだけであつて、大経営と小経営の区別がないからである。ドイツでは手工業と家内工業がまだ非常に重要な位置をしめているので、その結果、ドイツに有利にあらわれるのである。

第5表

	ドイツ	大ブリテン
木綿工業	30.0パーセント	51.0パーセント
羊毛工業	24.0 "	28.0 "
亜麻および麻加工業	18.0 "	13.0 "
絹糸工業	12.0 "	4.3 "
靴下加工業	11.0 "	2.0 "
レース工業	5.0 "	1.7 "
	100.0パーセント	100.0パーセント

しかし、この繊維産業という大きな職業グループを、再びその内部構成によってみれば、イギリスとドイツには差がある。

就業者比率は次のようであつた(第5表)。

イギリスにおける繊維産業は木綿工業と羊毛工業に集中しているが、ドイツでは非常に均等な配分がなされていゝ。ドイツにおける絹糸工業・靴下加工業および

部門である。部分的には、われわれがすでに前に明らかにした特殊生産物であるということも重要なことである。

木綿および羊毛工業をとりだしてみれば、ドイツでは、業が急速に出現してきていることが示される。それはイギリスの、紡糸輸出の結果である。これもまた、イギリス自身がいか

に競争相手を育成したかという一つの事例である。一般に、繊維産業に注目してみれば、ドイツでは非常に零細であるが、繊維産業がここでは相対的に高い地位を占めていゝという限りにおいては、その一般的性格とは対照的に、ヨーロッパの個人的消費品目の生産をめざしていることが示されている。

第Iグループについても同様である。鋳業(石炭)は第IIIグループと、製鉄業は第IIグループと結びついている。

ドイツ工業の特性を示す第IIグループは雑多である。そこでは、食糧および生活必需品が主要な地位を占めている。それは主に国内需要向けの生産である。しかしながら、ここでも、われわれがはじめに述べた酒精蒸留業および砂糖工業という輸出産業がある。石材業および窯業は、このグループと第IIIグループを結びつけているが、その他に、重要な輸出生

びレース工業の相対的に高い地位がめだつ。それらはまさに、まずはじめにヨーロッパの需要が計算に入れられている工業

パルヴス「世界市場と農業恐慌」(一)(大藪・鈴木)

産部門であるガラスおよびガラス加工業(鏡)、そして陶磁器製造業を含む。この多彩なグループの一般的な性格は、生活需要品およびヨーロッパ工業の補完物質(染・顔料)の製造業である。第Ⅰグループが資本主義の生産的需要向けの生産として特徴づけられるとすれば、第Ⅱグループはヨーロッパの都市生活需要向けの生産として特徴づけられる。

こうして、一見して偶然的にみえるドイツ工業のこのような構成は、実際には世界市場の発展の中のドイツの地位によって条件づけられていたのだということがわかる。この地位については、われわれは前章でその特徴づけをした。

次に、販売領域によって規定される工業の性格は、もちろん、輸出の量的構成にあらわれる。

イギリスの輸出のうちで繊維製品は四四パーセントであるのに対し、ドイツのそれはたった二一パーセントにすぎない。木棉製品はイギリスでは輸出の三〇パーセントで、ドイツでは五パーセントである。ドイツの木棉製品の輸出額は(単に輸出〔入〕……訳者)超過というだけでなく、その原料木棉の入額よりまだかなり少ない。それは、この生産部門の販売がまだきわめて国内的である証拠である。これとは逆に、イギ

リスでは輸出された木棉製品は輸入された木棉の二倍の額である。しかし、ドイツは、靴下・レース編み、および刺しゅう製品・陶磁器では、相対的にも絶対的にも非常にめざましい輸出をしている。

イギリスに対してドイツの繊維工業の輸出が相対的に少ないことは、第Ⅱグループの分野の輸出によって十分にうめあわせががついているが、それはくわしく論議する必要はない。ドイツにとつての第Ⅱグループは、イギリスにとつての第Ⅰグループと同じであり、世界市場におけるドイツを「代表する」。

今までわれわれは、ドイツの事例により、世界市場の中におけるヨーロッパ大陸の工業の地位の特徴を問題にしてきた(後にわれわれは、その特徴とヨーロッパ農業の発展がいかに関連しているかをみるだろう)。しかしながら、ドイツとそれぞれの諸国との貿易関係にはいろいろな方があるにちがいないことは明白なことである。だが、このあり方の相異は、われわれが代表として選ぶ三つの型に総括できよう。それは、ドイツとイギリス、ドイツとフランス、そしてドイツと合衆国の貿易関係である。このような説明は世界市場におけるドイ

ツの地位を完全に描き出すだろう。ドイツの外国貿易に関する年報が、この際にきわめておあつらえむきの材料を提供してくれる。

大ブリテンとドイツの貿易。この場合は、基本的には、一八九三年に統計局によってなされた一般の特徴づけを挙げれば十分である。「輸入でも輸出でも、大ブリテンは、ドイツの関税領域の外国貿易において第一の地位にある。ドイツは、大ブリテンからドイツの多くの企業部門が必要とする原料および半製品を購入している。……この点では、繊維・金属および皮革工業、ならびに脂肪および油脂産業に伴う化学工業が主たるものである。……大ブリテンが関税領域に供給する原料生産物の一部は海外諸国からもってくるものであり、残りは大ブリテン自身において生産するものである。後者には、まず第一に、石炭および銅が属する。大ブリテンからの関税領域への輸入においては、棉糸および毛糸の半製品を除けば、工業生産物は二次的なものとみられる。大ブリテンへの関税領域の輸出はとりわけ製品に関するものであり、原料生産物および半製品は従属的な役割しか果たしていない。」

大ブリテンへの最も傑出したドイツの輸出品目は次のよう

パルウス「世界市場と農業恐慌」(一)(大藪・鈴木)

なものである。すなわち、砂糖・絹織物半製品・被服および服飾品・皮革品・布および織物類(羊毛品で捺染がないもの)・染料・銅版画・バターおよびマーガリン・手袋用皮革・木材・アニリンおよびその他のタール染料・靴下製品・レースおよびボタン製品・目の細い木棉(染色と装飾つき)・ピアノ、等等。このような特徴は、われわれが前に示した、ドイツの輸出の一般的性格と完全に照応している。

かくして、ドイツとイギリスとの関係は明らかに正反対である。以前にはドイツが製品をイギリスから購入していたが、今はそれをイギリスがドイツから購入している。しかし、その一方、ドイツは輸用品には生活手段で支払い、原料は二次的であったが、イギリスは原料ないし半製品で支払っている。最初の交易は究極的なものであった。というのは、生活手段はイギリスの個人的消費に入り込み、工業製品はドイツのそれに入り込むからである。だが、後には決してそうでない。というのは、ドイツがイギリスから購入する原料は、生活ではなくて生産を更新するためのみ役立つからである。この交易そのものをとりあげてみるなら、もし、ドイツの製品の輸出がその価値を完全に実現したとすれば、生産を拡大

するようにはたらくに違いない。なぜなら、製品は、その性質上、原料よりも高いからである。イギリスとドイツとの交易がこのような方向に拡大するにつれ、それだけ一層（逆の場合）は逆なのだが、ドイツの工業は拡張し、その製品輸出に対する欲求はげしくなり、国内での工業と農業の矛盾は大きくなり、生活手段の輸入に対する要求は拡大し、そして、製品に対して生活手段を交換できるような国と貿易関係をもつ必要が大きくなる。ちょうど、発見された骨が古生物学に骨格の全体像を与えるように、世界市場からぬきとった二国間の貿易関係が経済学に、その補完的な部分がどのようになっていないか、そして、世界市場は有機的にどのように結合しているのかを示してくれる。

他方、ドイツの輸出が製品輸出になるにつれ、また、自国の生産が国内市場をおおうようになるにつれ、イギリスはそれだけ原料で輸出をすることが必要となる。イギリスは、以前と同様に植民地で製品と原材料を交換するが、それを自国で加工し、できあがった製品をドイツで生活手段と交換するかわりに、この原材料をドイツへ運び、その代価として製品をもちかえるのである。だが、逆流する製品の価値の流れの

方が原料の流れよりも大きいので、イギリスはこの原料の流れをさらに拡大しようとする。しかし、その結果、とうとう輸入された製品を消費することすらできなくなる。こうしてイギリスは、この製品を一部再輸出せねばならない。そのことをドイツ統計局は次のように確認する。「関税領域から大ブリテンに供給された工業製品は、しばしば、再びそこから海外諸国へ輸出される。」

このような発展は単に貿易の変化だけではない。ドイツと東インドの間にはイギリスの商人が存在しているだけではなくて、原料および製品に対するイギリスの需要、つまり、イギリスの工業が存在している。重要なことは、国民的資本の循環的変動の内的および相関的な把握、何の政治的および国民的な限界も知らない唯一一つの社会的資本の循環への同化、である。

ドイツとフランスとの間の貿易は、二つの同じような国民的工業の関係を示す。

確かに、ドイツとフランスは蒸溜酒業と砂糖工業をお互いに共通にもっている。両者は、貿易において今や相殺しあう。ドイツとフランスに関して、若干の他の工業も共通にもつ

ている。それゆえ、輸入と輸出は、一般的なかたちではきわめてしばしば同一である。手袋・真綿・羊毛・皮革品および他の多くのものと同様に、たとえば、羊毛布および織物類が輸出入される。

それゆえ、その貿易はきわめて分散的である。大きな商品グループは何もない。フランスのドイツへの商品輸入は、一八九三年において、二億四一〇〇万マルクのうち、最も主要な輸入品目であるぶどう酒の価額が一六〇〇万マルクであり、同じ時に、ドイツのフランスへの輸出は二億三〇〇万マルクのうち、最も主要な輸出品目であるコータス<sup>(1)</sup>の価額は二二〇〇万マルクであった。この交易は、価額がお互いに同じような小額の商品一二品目でみだされている。三五品目もの商品が、合計一〇〇万ないし二〇〇万マルク輸入されている。工業の国民的差異はほとんど相殺されている。貿易の動きは国内流通に似ている。それが完全にそうならない(そうなる?…  
…訳者)ことを関税障壁は阻害する。

アメリカ合衆国は、すでにイギリスとの貿易を説明する際に証明したように、ドイツ帝国の外国貿易における補足的な部分である。

バルルス「世界市場と農業恐慌」(一)(大藪・鈴木)

ここでも、われわれはドイツの官庁統計による一般的な特徴づけで満足し得る。「アメリカ合衆国とドイツ関税領域との貿易において、ドイツの輸入に関しては、まず第一に農業および鉱業の原料生産物が重要であり、それは主に、木棉・穀物・石油・未加工の葉タバコ・銅であり、それから、肉とか豚脂とかいった畜産物である。」

「これに対して、アメリカ合衆国はドイツ関税領域から種々の工業生産物、その中でも、靴下・絹の半製品・織物類といった繊維製品さらに砂糖ならびに、手袋およびその他の皮革製品を購入した。」

それは資本主義的植民地貿易である。原始的な国ばかりでなく文化的な国も植民地としての役割をはたす。したがって、この場合、ドイツの輸出についてみれば、ヨーロッパで需要されるのと同じ商品に出会うのである。

合衆国へのドイツの輸出は総輸出の一パーセントで、ヨーロッパへの輸出とあわせると八七パーセントになる。ドイツのヨーロッパおよび合衆国に対する関係が明らかになるにつれ、その世界市場における全体的地位も特徴づけられる。この場合、新しく芽ばえているものは考慮されられていない。

同様に、北アメリカは販売領域としてのみ考察し、その一般的な工業および農業の発展において考察することはできなかった。

それはドイツの工業と貿易に関しても同じである。それらがヨーロッパ大陸にとつては典型的であるということは、部分的には、さきほどドイツとフランスとの貿易をみて示した。これを完全にするには、フランスの外国貿易をかんとんにみればよい。ドイツにおけるのと同様、ここでも繊維製品の輸出は全輸出のたった二〇パーセントである。フランスはその他に著しい量の原料絹と羊毛を輸出している。さらに、嗜好品、すなわち、砂糖・火酒類、それにブドウ酒が大きな位置を占める。残りは周知のわれわれの表の第Ⅱグループの他の代表品目で満たされている。すなわち、紙および皮革製品・ガラス製品・陶磁器、それにフランスではとくに注目すべき宝石および小さな奢侈品である。ここでもまた、輸出の質的關係はヨーロッパの販売領域の特徴と照応していることがわかる。

自国および全ヨーロッパの市場向けの生産をしているヨーロッパ大陸の工業は、植民地市場向けの生産をしているイギ

リス工業とは別の貿易政策上の関心をうみだすだろうということは明白である。事実、工業の差異はまた、貿易政策の差異に顕著に作用するのである。イギリスの貿易政策が外国市場を開拓することを目ざしているのに対して、ヨーロッパ諸国の貿易政策は、とりわけ、国内市場を隔離することを目ざしているのである。しかしながら、ヨーロッパの保護関税の中には、ヨーロッパの資本主義的生産の諸関連、したがってまた工業と農業の關係、これらすべてが、資本主義的生産の性格に照応して、対立と矛盾としてあらわれているのである。

#### 四 都市と鉄道

鉄道は、その本質上、現代的な起源をもつて登場するのに對して、都市は一世紀にもわたる歴史をもっている。にもかかわらず、今や都市は明らかに資本主義的な性格をもっており、それに先行する諸々の社会形態の都市とは基本的に區別される。問題は、K・ブュッヒャー教授がその興味ある国内旅行記で正しくも指摘しているように、現代の都市が非常に分化しているということだけにあるのではない。最も興味を

引くのは資本主義的大都市という類型である。次々に何十万もの住民を集め、考へうる限りあらゆる種類の職業を集中し、膨大な新しい種類の職業を生み出し、一国の限界をはるかに超えて拡大された経済的結合をもち、世界生産内部での自立経済機構のようにみえ、その独自の都市経済を営み、独自の財政政策を行ない、不断かつ無限に拡大しうるかのようにみえ、一般的経済状態からは成長そのものではなく成長の程度においてのみ影響されるものは、まさに大都市である。ただし、大都市は、その社会の生存の基礎、つまり食糧の生産はせずに、反対に、たえず農業人口を吸収することによって、農村におけるこの生活手段の生産階級を相対的に減少させさせる。

この資本主義的大都市という最も重要で最も驚嘆すべき資本主義的生産の諸現象の一つは、今までのところ、ほとんど研究されていないに等しい。学問的には、一九世紀後半のドイツの都市よりも、中世のドイツの都市の方がよく知られている。しかしながら、中世のことは事の部分的切れはししかわからないが、一九世紀後半の方は、使いこなしきれないほどの統計のおよび記述的な資料が利用できる。

パルヴス「世界市場と農業恐慌」(一)(大藪・鈴木)

一つだけ差異がある。それは、資本主義的な都市の発展を理解しようとすれば、資本主義的生産を理解しなければならぬということである。古代に関しては、もちろん、このような知識は必要でない。記録のごみためや多くの山のような書類を掘り返すだけでは、資本主義的な都市の場合には十分であり、科学的な解剖台におかれ得るような死体では決してなく、錯綜した現実の中へ入り込まねばならず、たえず運動している生命にそくして、その生命はどのようなものかということを認識せねばならない。

わき道にそれるのを許していただきたい。実践的な問題を説明するために、他人によって正當に学問的によく整理されていてもう政治家が一般的な結論だけを理解しさえすればよいような研究領域に言及せねばならない、ということを理解するのは、時評家にとっては苦痛である。もし、国内市場の記述の際に都市と鉄道の役割を見逃すなら、われわれの工業市場の性格づけは明らかな欠陥をもつことになるだろう。だから、研究はこれらとの関連においてのみなされるべきである。

われわれは鉄道からはじめよう。それを国内輸送の観点か

ら主として觀察することは奇妙にみえるかも知れない。だが、その明白なる役割は、実際には次のことにある。すなわち、国内における都市相互および都市と農村住民の間の輸送をすることである。旅客輸送については、このことは特にとりたてて明らかにせねばならないということはない。貨物輸送に關しては次のような説明が事態を明らかにする。

一八九一年に一億六二〇〇万トンであったドイツの鉄道の総貨物輸送のうち一億三七〇〇万トンが国内輸送であった。もちろん、この鉄道の国内輸送からは、海を越えて外国へ輸出される港向けの輸送量と、海外から輸入されたものは差し引かれるべきである。しかしながら、ドイツの鉄道と港との間の総輸送量は二、〇〇〇万トンもない（一八九四年は約一、八〇〇万トン）。

一億三、七〇〇万トンの鉄道による国内輸送は、次の三つのグループの消費品目が主要な構成要素となる（第6表）。

このような商品グループにおいて、疑いもなく第一に重要なのは都市的需要である。しかしながらまた、残りの食糧および工業用原料の輸送のうち、まさに最大部分は都市のものである。

第6表

1. 燃料	63.1 (うち石炭 51.6)
2. 建設用材	20.3 (うち建築用石材 12.3)
3. 穀物およびジャガイモ	6.4
合計	89.8百万トン

このような関係は、ドイツのような国においてこそ非常にわかりやすいのである。農村の住民は、この国では、抑圧され・空腹をかかえた農民階級であり、家は貧しく、ぼろを着て、その需要はほとんど最少限に制限されている。しかし、またもう一つのこともいえる。

人は、安価な鉄道運輸をいつも賞賛してきた。その場合には、常に大量輸送が考えられた。しかし、この大量輸送は鉄道によつてはじめて生まれただけである。それなしには、すぐにわかる理由から鉄道輸送は非常にコストがかかるだろう。だが、大量輸送は大きな商業中心地を必要とする。こうして、すべてが都市から都市へと流れるのである。都市と都市的需要は増大する。都市の産業が成長し、鉄道輸送が増大する。

都市が鉄道を生み、鉄道が都市を生む。もちろん、われわれは唯一つの発生原因のあれやこれやの側面をとりあつかっ

第7表

期 間	新規に運行されたベルリンの鉄道線の距離	平均人口1,000人当たりの増加
1841から1850年まで	941キロメートル	18.1
1851から1860年まで	137	9.6
1861から1870年まで	684	32.8
1871から1880年まで	987	22.4

ているわけではない。しかしながら、都市が崩壊すれば鉄道は壊滅する（もちろん、問題なのは資本主義的諸関連のみである）。鉄道をとり除けば、都市はもはや存在し得ない。

ベルリンの場合、次の表がこの関係についての一瞥を与える（第7表）。

もちろん、都市と鉄道との結びつきが、常に、その都市への人口の流入を条件づけるというわけでは

小都市の駆逐の過程をもっとはっきりと示した。

鉄道は、都市の発展一般を助けるのではなく、とりわけ大都市の発展を助けるのである。そうなればなるほど、商品流通は大都市に集中し、最後には全国生産の重点は大都市におかれるようになる。鉄道は精密な吸盤器つきの網のようなものであり、それによって大都市は人と商品を国中から吸いよせている。こうして、生産の発展は大都市の発展と密接に結びついている。

だが、このような大都市とは何であろうか？ それはどのようにして存在しているのだろうか？ この問題に答えるためには、まず第一に、都市の職業統計をみなければならぬ。

官庁で集計した一八八二年の職業統計が大都市（住民一〇万人以上の都市）の特別な統計を与えてくれる。それによると、就業者比率は次のようになる（第8表）。

都市における農業生産の欠落は、工業によって補われていないことがわかる。ドイツの大都市は何ら工業都市ではなく、むしろ商業都市として特徴づけねばならないだろう。なぜなら、C部門は、大都市ではドイツ全体と比較して相対的にほ

ない。数年前ドイツ帝国統計月報で公表された研究は、もちろんきわめて欠陥の多いものではあるが、相対的に小さな都市では相対的な増加率が低下しており、鉄道の開通直後には流出によって減少しさえしていることを示している。<sup>(1)</sup>ここでは、鉄道を媒介として、相対的に小さな都市のたちおくれが、大都市における人口の集中化のためになされたのである。オーストリアの人口統計に関する新しい仕事は、大都市による

第8表

職 業 分 類	15大都市	ドイツ全体
A. 農 林 業	1.1	40.4
B. 工業(鉱業を含む)	43.2	31.5
C. 商業および運輸業(飲食店を含む)	20.4	7.8
D. 家内サービス <sup>(2)</sup>	15.7	8.3
E. 国家および自治体公務員等, および自由業者 <sup>(3)</sup>	10.3	5.0
F. 無職の自活者 <sup>(4)</sup>	9.5	0.6

ぼ三倍も大きくあらわれている(飲食店を控除しても、その関係は同じままである)。だが、ドイツの大都市を経済的に特徴づけるのには、商業だけでは完全に十分とは言えない。

次のような一般的な差異が目につこう。すなわち、ドイツでは、就業者の七二パーセントが農業と工業、したがって財貨の生産に従事しているが、大都市では、それは四三パーセントにすぎない。<sup>(5)</sup> 今や、たとえ、他の職業の就業者が社会的にどんなに必要であっても、彼らの基礎は、他の就業者によって彼らに財貨が生産されることにある。彼らは、経済的には消費者としてあらわれるのであり生産者と

してではない。この大都市の人口の五七パーセントの就業者をみる限りでは、大都市の農村との商品流通は、一、方的であるといえる。すなわち、商品を渡すことなしに商品を受け取る。

では、残りの四三パーセントの生産的な就業者がこの一面性を十分に補償しているだろうか？ 今度はこれを検討しよう。

大都市の工業の就業者総数は七四四、五三四人になる。しかし、そのうちの多くは、大都市の需要だけのために働いている職種である。なぜなら、建設業とその補助産業、それから、それぞれの都市の存在によって条件づけられている諸活動は、都市産業だからである。つまり、ガス会社、水道業等、それから、直接生活需要を満たすためのパン屋・肉屋等の職業、そこにはまた薬局も入るし、最後には写真屋のように生産物の購入者と離れてはほとんど就業できないような種類の生産。このような職種は、もちろん、大都市から農村への商品流出は存在しないか、きわめてわずかしみられない。その就業者を合計してみれば、二三九、一七六人という大きな数で、就業者の一三・七パーセントである。かくして、外部

への商品輸送がなされる仕事には、なお就業者の二九・六パーセントしかたずさわっていない。

しかしながら、この三〇パーセントも主として外部のために生産しているというわけではない。逆に、その中には、未だかつて都市の需要さえも満たしていないような職種があったが、さらにくわしい比較ができるように、われわれは、平均してどれだけの大都市およびドイツ全体の住民が、個々の産業グループのそれぞれの職業に分けられているかを

第9表

産業グループ	就業者1人 当り住民数	
	15大都市	ドイツ
鉱山業、冶金業等	490	103
石材業および窯業	281	136
織維業	101	53
製鉄業	97	99
食糧および生活用品加工業	46	68
服飾および衛生業	15	34
金属加工業（鉄を除く）	177	632
機械器具等製造業	53	158
化学工業	186	511
製紙および皮革業	78	206
木材および彫刻材料業	51	86
印刷業	108	650
工匠	512	1,892

バルルス「世界市場と農業恐慌」(一)(大藪・鈴木)

算出した(第9表)。

一つの生業に属する住民の数が、少なくなればなるほど、当該の産業グループはそれだけ地位が高い。われわれの表は、大都市においては鉱山業・石材業および窯業そして織維業はドイツ全体におけるよりも相対的には非常に地位が低く、その結果なお一層、ここでは商品移出よりも商品移入が予想される。ベルリンに関しては、実際にも、そのことは鉄道による商品の動きの統計から証明される。

製鉄業は同程度に分布している。食糧品および日用品加工業は、なるほど大都市で数が多いが、それはまさに、これらの生産に対する大都市の商品需要がより大きいということに条件づけられているのである。そのことは、もはやすでに、服飾および衛生業に関しては同じようにはあてはまらない。(6)次いで、ようやく、移出することを目的とする、大都市の産業部門が続くのである。

大都市の輸移出産業は、合計二五万一千人を就業させており、それは就業者総数の一四・四パーセントである。したがって、もし、大都市の就業者のうち一〇パーセントが、農村によって購入される必需品を交換用に生産することに従事し

ていると考えるならば、それはきわめて高くみつもっていることになる。

ドイツの大都市全体の経済像は、いまや、次のように示される。

五六パーセントの就業者は何も生産しない。

三四パーセントが、この五六パーセントおよび自らのため

に工産物商品を生産する。

一〇パーセントが、農産物およびまだ不足している農村の工産物と交換するための商品を供給する。

しかしながら、農村自体においては、一〇〇人の就業者につき四〇人が、農産物に対する需要を満たすためにだけに必要となる。かくして、そのために就業者の一〇分の四が必要となり、さらに大都市の一〇分の一の就業者の労働生産物と交換されるべき労働が必要である。明らかに、その労働は大量のものであるとは考えられない。しかしながら、そうすると、大都市は農村に販売するよりも多くの商品を農村から購入し、その差額を貨幣で支払わねばならなくなる。われわれは、国内の商品流通の価値統計を何もっていない。しかし、以前と同じように、重量統計も十分な説明として役立つ。つ

まり、一八九四年にはベルリンは鉄道で四四〇万トンの商品を受けとったが、八〇万トンしか送っていない。プレスラウは二五〇万トンを受けとり、五〇万トンを提供した。

そのことは、再び、鉄道の役割に対して光を投げかける。すなわち、鉄道は相互の交換を媒介するだけでなく、都市への搬入手段として役立っているのである。

しかしながら、この大都市は不足している入要商品を購入すべき貨幣をどこから手に入れるのだろうか？ それは、再び、大都市の職業分類によって示される。

まず第一に、不均衡なほど地位の高い商業が、都市の外で生み出された剰余価値の一部分を貨幣形態で都市にもたらす。商業には、銀行によって供給された信用流通も、それが当該銀行に利潤をもたらす程度において含まれている。第二の貨幣の源泉は、官僚の所得であり、それは税金というかたちでとりあげられる。第三の源泉は、年金生活者が彼らの資産に対して支払われる貢税である。しかしながら、これらの貨幣収入は、農村に対する都市の購買力を増大させるものとしてのみ、すなわち、それが都市で生産された剰余価値の分配から生まれるものではなくて都市の外から、つまり、国内流

通に限定するなら、農村から流入する限りにおいて生ずる。したがって、大都市が過剰な需要のある商品と農村から購入するのは、農村から引き出された貨幣によってである。

ザクセンの所得統計によれば、都市の所得の一四パーセントは年金からであり、それは農村では九パーセントにすぎない。しかしながら、この数字はまだ現実の状態を示していない。なぜなら、ザクセンの統計は都市においても地代からの所得を特別な所得源泉として挙げているが、これは都市においては派生的な所得であり、賃貸利子として他の所得から差引かれ、しかも、少なくとも年金所得からは切り離されているからである。この額だけ総所得が減少すれば、もちろん、年金所得の比率は増大する。しかし、年金所得は、それ自体二つの大きなグループに分かれる。すなわち、国債と抵当権である。二つとも農村全体を都市に対して貢納義務があるようにさせる。

こうして、大都市は消費と貨幣の貯水池としてあらわれる。剰余価値はここで合流し、一部は所得として消費され、一部は信用機関が生産に再投下する。したがって、ここでまた、取引所が中心となるのである。だが、取引所によって、国内

バルヴス「世界市場と農業恐慌」(一)(大藪・鈴木)

の鉄道網よりもはるかに広汎な結合が生まれる。今や、剰余価値は、最も遠い国々からも大都市にもたらされ、ここで取り引きがなされ、所得と資本が分割され、二つの相異なる循環がはじまる。大都市は国民的な卵のからをぬぎすて、世界市場の結節点になる。今や、それらは、国内に対して世界的(Kosmopolitisch)資本の支配人としてあらわれる。もはや何の国民的な生産の制限もない。電信用キイをひと押しすれば、最も遠い国から貨幣・生産手段・原料・労働者がやってくる。そして、生産が世界生産になるように、大都市は世界都市(Weltstadt)になる。

しかし、どの都市も世界市場の中心となり得るわけではなく、この高度の商品流通および資本蓄積の栄光に至る途中には、さまざまな発展諸段階および発展諸形態を通る。

一般に、資本主義の都市の三つの現象形態が区別されるが、それはまた、一つの都市の三つの発展形態としてもあらわれる。

I、商工業都市。それは、外国の商品と国内産業の生産物を農村住民に供給する。その前提は農産物の大量の輸出である。その純粋型はアメリカにおいて研究できる。

Ⅱ、工場都市。それは、たいてい一定の工業部門を集中している。それは、ほとんどの場合、植民地的販売を前提としている。それは、どの場合でも、植民地的販売を限られた現象以上のものとする必要がある。

この種のもはイギリスにおいて最も完全に発達した。

Ⅲ、消費および貨幣蓄積の中心としての大都市。どんな農産物輸出も支配的に行ないえず、一つの植民地的販売領域も意のままにならないドイツの資本主義的發展は、このような都市の型を相対的に早くから形成させた。この發展はまた、プロイセンとドイツの官僚的軍国主義的な特性によって促がされたとするは、他方では、その發展がその特性の支えになつている。

ドイツの大都市はドイツの農業にきわめて革命的な作用を与え、それと共に浸透する資本主義的な結びつきによって、大都市は農業の自然經濟を破壊する。それは、農業と結合した工業部門に対する最初の販売領域を形成する。大都市はまた、この工業部門を發展させるために資本を調達する。最後に、大都市は、商品流通および信用流通によって、農業の運命を大都市自身の運命と非常に密接に結びつける。農業が国

家の經濟的基礎を形成したような時代は過去のものとなった。今や、都市は国内農業なしでも存在できる。しかし、都市なしには農業はあり得ない。農業の發展から都市の發展を導き出すことはできないし、もはや、都市の發展を考慮に入れなければ農業の發展はまったく理解できない。

われわれは、この都市および鉄道の特徴づけをもって、さしあたり工業の諸關係の考察を終えて、農業の方に向かうことにする。

## 五 農業の矛盾

農業の諸關係は、今日では、多くの互いに矛盾した現象を示す。われわれは、農業の發展の実証的な説明に入る前に、この矛盾について簡単に言及しておく。

一、人は、外国の穀物の競争が市場に及ぼす圧力を嘆く。最近まで、そのような競争相手として、とりわけ、ロシアと合衆国が考えられてきた。また実際に、その競争は非常に激しく、それらの国はあらゆる関税障壁をもとはしなかった。だが、われわれはたった今、いかにロシアが經濟的に飢餓におちいったかを見てきた。そして、小麦の流通において最も

強力な競争相手である合衆国は、最近の一五年間で、この国の人口が二五パーセント増大し、相対的な収量が同じにとどまっているにもかかわらず、その小麦耕作面積は拡大せず、逆に、近年には減少したのである。

二、パン用穀物の世界市場生産、とくにヨーロッパおよびヨーロッパ市場とみられる諸国の生産は、数年来、絶対値において何ら上昇せずに、むしろ人口に比して減少している。また、生産費は合衆国でもヨーロッパでも下がらず（一八八五年以来、合衆国における運賃も変わっていない）、にもかかわらず、穀物価格は下がっているのである。

三、もっと大きな期間をとってみれば、ドイツに関しては、穀物価格が下がっているにもかかわらず、穀物消費が減少していることが示される。

四、穀物価格が下がり、人口一人当りの消費が減退しているにもかかわらず、ドイツでは国内の穀物流通は増大している。

このような農業の諸矛盾は、農業の発展を全体的な資本主義的生産の発展と関連させてみれば、おのずから解明される。農業の商品流通そのものが、工業および資本主義的世界生産

パルヴス「世界市場と農業恐慌」(一) (大藪・鈴木)

一般との関連なしには把握され得ないということは、ちょうど、血液循環が心臓の働きと呼吸行程の知識なしには把握され得ないということと同様である。

〔注〕

一 はじめに

(1) この研究の主な統計資料はイギリスの青書(議會・枢密院報告書……訳書)である。すなわち、年次別の Statistical abstract for the principal and other foreign countries, Statistical abstract for the United Kingdom, Statistical abstract for colonial and other possessions である。これらの資料を利用できないところでは、大ブリテンおよび他の諸国の別の官庁統計で補充した。われわれは、全体的な概観については、有名なノイマン・シュバルツ(Neumann's palat) ないしエーラシエク (von Juraschek) のそれを挙げよう。コンラッド (Conrad) の国家学小辞典からも若干の引用をした。

二 イギリスとヨーロッパ

(1) ロシアの資本主義的発展がドイツから非常におくれ、またアメリカにも、そして今や日本および東インドにすら追い越されたということは特徴的な現象である。だが、このような事態から、その原因が、ロシアの「ナロードニキ」が言うように、「外国市場」(彼らはこれを植民地市場と理解するのだが) の欠落にあるのではないということがおのずから明らかになる。なぜなら、「ナロードニキ」によって「外国市場」の欠落はロ

一三三 (四三五)

シアの村落共同体の原始共産主義が永久化することの代価であると確認されて以来、上記のすべての国が外国市場を次々に「発見」(一)してきたからである。

実際には、植民地的販売領域の発展に関してロシアは、たとえばドイツよりもはるかに恵まれているばかりか、特別に恵まれた地位にすらあるのである。黒海を通じて、ロシアは南アジア・東アジア、その他の太平洋諸国とつながりをもっているが、ロシア以外にこれらの地域と同程度のつながりをもっているのは地中海沿岸の諸国があるだけである。いま建設されるばかりになっているシベリア鉄道によって、中国・日本および北アメリカと直接に結びつくようになる。肥沃なシベリア平原への移住によって、最も重要な意義と最も広大な販売領域をもつ工業地帯の形成のための経済的基礎を生み出すこともできる。これらすべてのことと、さらに多くの別のことが、もしロシアがすでに工業国であったら、もうとつくになされていただろう。だから要点は次のことにある。つまり、ロシアが植民地をもっていないがゆえにその工業の発展がゆっくりにしているのではなくて、工業の発展が非常にゆっくりにしているがゆえに植民地市場を未だに開拓できないのである。

しかし、ロシアにおける工業の発展は、その国内市場の拡大を阻害する二つの事情によってはばまれている。それは村落共産制と絶対主義である。村落共産制はプロレタリア化の抑制という、かの非常に有名な特性が少しもあたっていないことが明白となり、むしろ、非プロレタリア的貧困化の過程が一層完全に確認されている。土地に縛りつけられているために、また、

みずからの労働力を自由にすることができないために、ただそれだけのことからプロレタリアには決してならない、すなわちその非自由性によってのみプロレタリアートから区別されるような、貧困な人々を村落共産制は生み出す。村落共産制は、プロレタリアートよりはるかに低い水準にあり、また、債務奴隷と農奴と化するほどになった経済的形態をつくり出す。それは、農民のどんな経済的改善も不可能にするほどのおびただしい過剰人口を農村に維持する。しかし、まさにこの農民階級が、工業的都市の形成が欠除しているロシアにおいて国内市場の役割を演ずることになったのである(かくして、ロシアにおける工業の発展を阻害したものは、手工業の競争ではなくて、むしろその競争がなかったことである)。

官僚的中央集権制に基づく絶対主義は、軍国主義のために、そして無用の官僚層のための国を育てあげるために、農村の富を使い尽くす。それは、過度の税金による圧迫で農民経済を破壊し、それによって農村の経済的諸源泉を破壊する。

民主的な政府なら、ロシアにおいて、とりわけ中央政府のもとで増大してきた生計の立たない農民層の一部をシベリアの耕作可能地域に流出させるといような課題をもつこともできたであろう。こうして、過剰人口から解放され、税金の圧迫が軽減されて、ここかしこに、もちろん共同体的共産制の最後の残りかすが払拭された、富裕な農民階級が発展しよう。そして、ロシアはアメリカと似たような経済的発展をなしとげるであろう。

もし、社会革命的で、ヨーロッパのプロレタリア国家に支援

された政府がロシアの経済的運命を決定するようになれば、いかなる点においても情勢は異なったものになるであろう。

### 三 世界市場におけるドイツの地位

(1) これは一八九三年の場合。

### 四 都市と鉄道

(1) ドイツ帝国統計月報、一八八四年、V、九ページ。

(2) 主に奉公人。官庁統計は、奉公人を「就業者」にとくに挙げているのである。われわれは、奉公人を就業者として計算に入れたという限りで、これを訂正した。それゆえ、われわれの比率は官庁のそれと完全には一致しない。さらにわれわれにとつては、就業者数だけではなくて、就業能力も問題となる。

(3) 現役軍人も含む。

(4) 大都市でもドイツ全体でも、主として年金生活者。

(5) 個々のドイツの大都市でさえも、一八八二年にはほとんど同じ比率を示した。すなわち、ベルリン五〇・八、ハンブルク四〇・八、ドレスラウ四一・五、ミュンヘン四〇・四、ドレスデン四一、ライプツヒヒ四一・四、ケルン四一、ケーニヒスベルク三〇・八、フランクフルト・アム・マイン三五・七、ハノーファー四五、シュトゥットガルト四二・五、ブレーメン四四、ダンツヒヒ三六・七、シュトラスブルク四〇・三、ニュルンベルク五一・九である。

(6) ベルリンのような個々の都市では、既製服業はきわだつた輸出産業である。

## 共同研究室

昭和四九年度第三回研究会（六月二十一日）

▼テーマ 戦後労働運動の時期区分について

報告者 塩田庄兵衛氏

### 報告要旨

一 歴史における時代区分は、社会構成体の変革を基準にしておこなわれる。

資本主義発達史（近代史、現代史）における時期区分は、資本主義社会を構成する諸階級の相互関係、すなわち対抗と連帯の関係、そこでの矛盾のあり方の変化・発展に即しておこなうことができる。たとえば、日本資本主義一〇〇年の歴史については、本源的蓄積期、資本主義の成立期、帝国主義への移行期、独占資本主義の確立と全般的危機の開始期、日本帝国主義の崩壊期、さらに対米従属下の国家独占資本主義期などに段階区分をすることができる。

しかし、労働運動史の時期区分となると、確固とした理論的基準は、まだ立ち立ってはいないと思われる。

二 戦後三〇年の日本の労働運動のなかには——戦前とくら